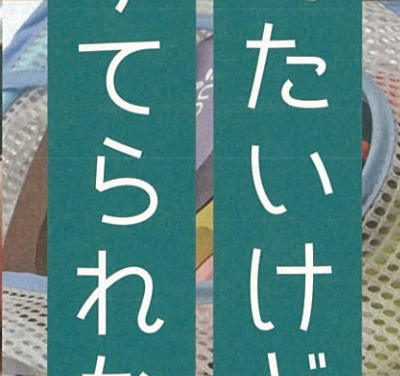
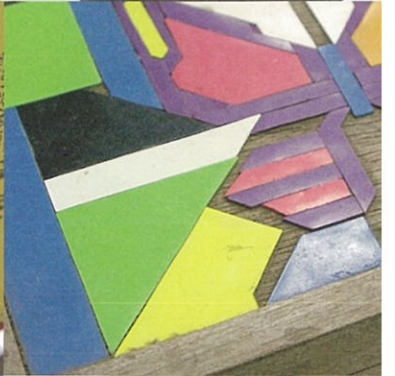
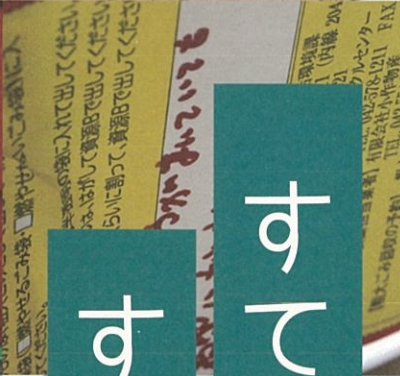




東京文化発信プロジェクト

東京アートポイント計画 × ●● TERATOTERA × 武蔵野クリーンセンター

すてたいけど
すてられないもの



この冊子について

平成 26 年（2014）12 月 7 日に武蔵野クリーンセンターで「クリーンセンターとあそぶ」というイベントが行われました。この冊子は、その企画の中の一つ「すてたいけどすてられないモノ展」の展示内容と展示に至るまでの経緯をまとめたものです。

武蔵野クリーンセンターは、現在建て替えが行なわれており、これをきっかけに、アートを通じて市民の方々にごみとクリーンセンターへの理解を深めてもらおうと、この展示に至るプロジェクトが企画されました。使われなくなったおもちゃを持ち寄り交換する「かえっこ」の発案者で美術家の藤浩志さんの監修の下、中央線沿線で展開しているアートプロジェクト「TERATOTERA」とクリーンセンターのコラボレーションにより実施されました。

このプロジェクトでは、武蔵野クリーンセンター周辺の方々などから、どの家庭にもひとつはあるであろう「すてたいけどすてられないモノ」と、そのモノにまつわる「エピソード」を4か月にわたって集め、最終的に展示しました。それぞれのモノを改めて見ると、人が関わってきた記憶が刻まれており、ごみとは何か、モノへの愛着といったことを改めて考えさせられます。この冊子が、身近に暮らす人やモノに思いを巡らせ、話し合うきっかけとなれば幸いです。

■武蔵野クリーンセンターとは？

武蔵野クリーンセンターは市内唯一のごみ処理施設です。燃やすごみ、燃やさないごみ、粗大ごみ、有害ごみが搬入され、焼却、不燃粗大処理等を行っています。武蔵野市民の生活を支えている、全市民にとってなくてはならない施設です。

■東京アートポイント計画とは？

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。
<http://www.bh-project.jp>

■TERATOTERA(テラトテラ)とは？

TERATOTERA(テラトテラ)は、「東京アートポイント計画」の一環として、東京都と東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)と、吉祥寺に拠点を置いて現在進行形の芸術をフィーチャーしている一般社団法人 Ongoing が協働して、JR 中央線高円寺駅～国分寺駅区間をメインとした東京・杉並及び武蔵野、多摩地域を舞台に展開する、地域密着型アートプロジェクトおよびその発信機関の総称です。

すてたいけど

すてられないうせ

目次

- 5 はじめに
- 6 すてたいけどすてられないモノあつめたい！ = SSA
「すてたいけどすてられないモノ展」ができるまで
- 7 SSA 活動スケジュール
- 8 SSA 発表！「すてたいけどすてられないモノ展」
- 9 これってごみなの？宝なの？（集ったモノとエピソード）
- 10 人からもらったモノ
- 14 家族との思い出
- 22 自分のきもち
- 30 どう捨てていいかわからない
- 32 なんとなく捨てられない
- 36 集まってしまったモノ
- 40 いつか使えるかも？
- 44 SSA テラッコより一言
- 45 おわりに

はじめに

家庭から出る99%の廃棄物を、妻と子どもと家族4人で協力して集め、ため続ける実験を行ったことがある。平成9年(1997)の1月から平成15年(2003)の秋ぐらいまでのことだ。ひとつひとつ綺麗に洗浄し、コレクションしはじめると、それは宝物に変化するから不思議だ。気持ちをかけて、ひとつひとつに深く関わることで、どんなものでも宝ものになる。

クリーンセンターは常識的にはごみの処理場なのかもしれない。しかし僕には新しい価値を生み出す素材の宝庫に思えて仕方ない。なにかを作りたい人やこれから面白い活動を行おうと思っている人、魅力的な素材を求めている人にとっては、様々な素材が集積するととても贅沢な所だとおもう。

人は日常生活の中で、心動かされた結果、様々な物を購入する。本人にとっての購入時の価値の尺度を100とすれば、その価値は状態や様々な関係のあり方によって変化する。愛着が増加し150や200になることもある。しかし残念なことに使い古されることで、飽きられてきたり、壊れたり、その価値は徐々に減少する。もしかすると価値が50を下回りはじめたころから廃棄を決める人もいるかもしれない。あるいはゼロになるまでなるべく長くとっておく人もいる。それは人それぞれなのだとおもう。しかし、本人にとっての価値と他者にとっての価値の評価は違う。本人にとってゼロの価値のものでも他者にとって100の価値のものもあれば、その逆に他者にとってゼロでも本人には150の価値のものもある。

現在、廃棄物かどうかを決めるのは本人に委ねられている。それが社会的に価値がゼロかということ必ずしもそうではない。価値を決定するのはあくまでも関係のあり方なのだと思う。些細な関係の構築が小さな価値を導き出す。そしてその価値の集積は地域の価値へと連鎖を促すのではないか。

今回のすてられないモノたちの展示はクリーンセンターの可能性を示す重要なデモンストレーションだった。地域には放置されたり廃棄されそうになっている様々な宝物があるということを証明した。その存在にしっかり意識を注ぎ、関係を結び、集積できる場があるとすれば、地域はもっと魅力的に素晴らしくなるに違いない。

すてたいけどすてられないモノ展
監修 藤 浩志



プロフィール

藤 浩志 [ふじ ひろし]

昭和35年(1960)鹿児島生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了後、パプアニューギニア国立芸術大学講師、都市計画コンサルタント勤務を経て平成4年(1992)藤浩志企画制作室を設立。バングラデッシュビエンナーレ(グランプリ受賞)、サイトサンタフェビエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭等の国際展の出品をはじめとしてインド、パキスタン、タイ、中国、韓国、台湾などアジア各地でのプロジェクトや国内の地域アートプロジェクトへの参加多数。

すてたいけどすてられないモノあつめたい! = SSA

「すてたいけどすてられないモノ展」ができるまで

平成 29 年（2017）の稼働に向け建て替え中のごみ処理施設、武蔵野クリーンセンターが、美術家の藤浩志さん監修の下、中央線沿線でアートプロジェクトを展開している TERATOTERA と共同で、ごみをテーマとしたアートイベントを企画しました。

平成 26 年（2014）7 月に行われた藤さんとの話し合いから、家庭にある「すてたいけどすてられないモノ」にまつわるエピソードと実物を集めることが決定。その後、クリーンセンター職員と TERATOTERA のボランティアスタッフ TERAKKO（テラッコ）を中心に「すてたいけどすてられないモノ集め隊[※]（略称 SSA）」が結成され、武蔵野クリーンセンター周辺の様々なコミュニティを訪ねて行ったインタビューと、10 月に 2 回行われたイベント、公募などを通じ、多くの方々から「すてたいけどすてられないモノ」とその「エピソード」を収集しました。

こうして最終的に集まった 100 点を超えるモノとエピソードは、12 月 7 日に行われたイベント『クリーンセンターとあそぶ』の中で「すてたいけどすてられないモノ展」として武蔵野クリーンセンターのプラットフォーム（収集車のごみを搬入する場所）に、展示されました。

募集チラシのデザインは、カラフルで親しみやすい。上部には「すてたいけどすてられないモノありませんか?!」という問いかけがあり、その下に「あなたのエピソードが、藤浩志さんのアート作品に!」という魅力的なメッセージが添えられている。中央には「消しゴム」の例として、子供が学校で毎日使う消しゴムが山積みになっている写真と、それにまつわるエピソードが紹介されている。下部には「すてられないエピソード大募集」という赤いバナーがあり、応募の切期（2014年11月20日）と展示開催日（12月7日）が明確に示されている。

応募用紙は、応募者の個人情報（氏名、住所、電話番号）と、展示希望の日程（11/25、11/26、11/27、11/28、11/29）を記入するための欄が設けられている。また、作品の写真を貼るための大きな枠も用意されている。下部には「〒118-0001 武蔵野区有馬町二丁目1番1号 武蔵野クリーンセンター」の住所と「TERATOTERA」のロゴが記載されている。

「すてたいけどすてられないモノ」募集チラシ
市内の各コミュニティへ配布、設置しました。

※すてたいけどすてられないモノ集め隊（略称：SSA）とは…

このプロジェクトを進める実動部隊の呼称。主にクリーンセンター職員と TERATOTERA のボランティアスタッフ（通称：テラッコ）を中心に、すてたいけどすてられないモノのエピソードの収集や地域の方々へのインタビューに協力し、プロジェクトの周知や運営に携わった個人や団体。「SSA」は、このプロジェクト名でもある。



SSA 活動スケジュール

- 7月13日(日) 藤浩志さん、クリーンセンター職員、テラッコの話し合い [テーマ決定]
- 8月9日(土) クリーンセンター周辺リサーチ&打合せ
- 9月20日(土) けやきコミュニティセンターのコミュニティカフェ「茶社」にてインタビュー
- 10月11日(土) UR 武蔵野緑町パークタウン集会所のコミュニティカフェ「グリーングラス」にてインタビュー
- 10月12日(日) 『ごみから学ぶワークショップ広場』(武蔵野クリーンセンター運営協議会主催イベント)にて、「すてたいけどすてられないモノ展」イベント開催
場所：武蔵野クリーンセンター
- 10月19日(日) 『むさしの環境フェスタ』(武蔵野市環境部主催イベント)にて、「すてたいけどすてられないモノ展」イベント開催
場所：武蔵野プレイス
- ※イベントでは、SSAのブースを設け、「すてたいけどすてられないモノ」エピソード集めのワークショップ、プレ展示を行う。
- 12月7日(土) 『クリーンセンターとあそぶ』にて「すてたいけどすてられないモノ展」開催
場所：武蔵野クリーンセンター

SSA 発表！

「すてたいけどすてられないモノ展」

日時：12月7日（日）12：00～16：00

場所：武蔵野クリーンセンター内プラットフォーム

内容：「すてたいけどすてられないモノ展」

SSA ワークショップ

藤浩志さんの「すてたいけどすてられないモノ」コメントツアー

テーブルいっぱいになべられた、すてたいけどすてられないモノたち。SSAは、武蔵野クリーンセンター周辺の方々などの協力をいただき、すてたいけどすてられないモノを集めてきました。どれももう使えないものだったり、使い道に困るものだったり。でも、それぞれのモノに添えられたエピソードには、くすっと笑えるものや、じんわり心が温まるものも。持ち主の生きてきた証がしっかりと刻み込まれていました。

コメントツアーでは藤浩志さんが一つひとつのテーブルを回りながら「ああ、これはいいものですねえ」と話し始めると、それまで押し入れにしまい込まれて光の当たらなかったモノたちにスポットライトが当たり、すてようと思っていたモノを改めて見つめ直させる、そんな展示となりました。

また、当日来場された方が、自分の「すてたいけどすてられないモノ」について、エピソードと絵をその場で書き展示する SSA ワークショップコーナーも設けました。



これってごみなの？

宝なの？

(集まったモノとエピソード)



「トゥシューズ」あやなみん

私は2歳から16歳までクラシックバレエを習っていました。バレエが大好きでした。30歳代に突入し、もう履くこともないと思いますが、なんとなく最後に履いていたトゥシューズが捨てられません。

人からもらったモノ



「金のオオカミ」 瀬山 岬

韓国留学中に知り合ったモンゴルの方にもらったもの。私が寮を離れるとき、ずっと手渡してくれました。

なんだろうな、と思っていると「コミエヨ(クマです)」とのこと。はてな?という顔をしていた私に、彼は遠吠えのようなマネをしてくれました。私は「オオカミ」と確信しました。彼いわく、どうやら力を授けてくれるモノとのこと。あまり話したこともなく、接点もなかった彼が贈り物をしてくれたので意外でした。嬉しかったのですが、飾りにするには小さく、キーホルダーには重くて硬すぎる。かといって捨てられない…というのが現状です。

ちなみにこれがクマではないかと気付いたのは少し経ってからのことでした。

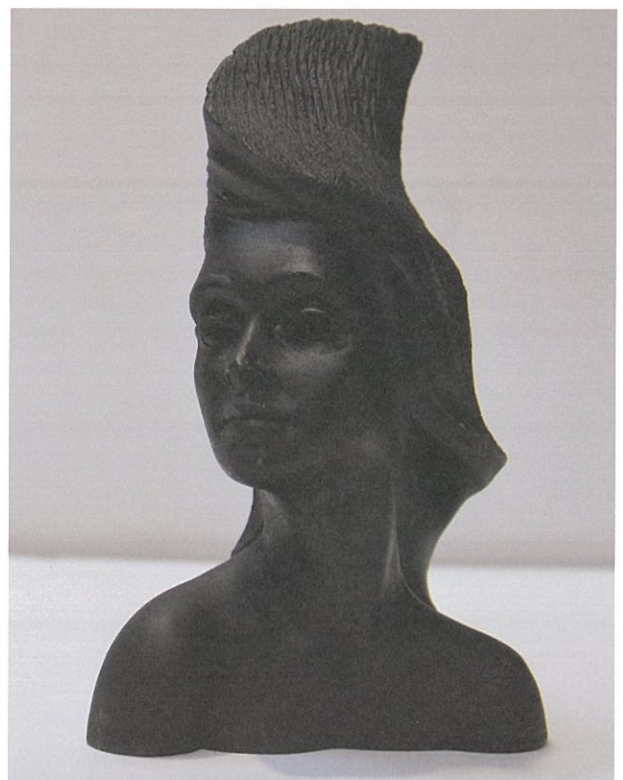
「学生時代の恋人にもらった置き物」 吉田

40数年前、学生時代の恋人にもらった置き物。現在はもう付き合いはなくて、彼女のご結婚されてお子様もいるようです。

普通だったら、関係が終わったらすてなくちゃいけないと思う。特に恋愛の場合は。

これを見て彼女を思い出すということはもうない。だけど、見て、綺麗だなと思うから何だかすてられない。

彼女からこの置き物に気が移ったのかな。





「オモイデボトル」はな

大学院生の頃、なかなか希望するところでの就職が決まりませんでした。卒業間近の2月末、やっと就職が決まったときのサプライズでお祝いにももらったもの。就職につながるようにと1年間やっていたインターンお疲れさまの意味もあったみたいです。

私のやりたいことを応援してくれている証のような気がして捨てられません。



「親友の形見の洋服」鎌内 啓子

亡き親友からのかたみの洋服、ハンドバック、ストール等、(彼女とは世界各国を一緒に旅し何回も姉妹ですかと言われたものです。)

「後ハイの想い☆」とよ

大学の後ハイから(いらないから)あげるといわれて押しつけられた派手なぼうし・・・。
もらいものだからなかなか捨てられない!と「似合わないし・・・おっきいんだよー!」と叫びたい・・・
後ハイに向けて(笑)



「旅先でもらったてるてる坊主」 後藤 響子

大学の研修旅行で訪れた奈良。天気予報では3泊4日の後半2日に雨マークがついていた。

なんとか天気もちますように！と雨女の私は祈っていた。

2日目に泊まった旅館で、部屋に入ると机の上には湯のみが入った箱とバドミントンの羽みみたいな形をした白いものが置いてある。てるてる坊主だ！何年ぶりかに見た手作り感の溢れるそれは、にっこりと笑っている。さっき出迎えてくれた年配の女将さんが作ってくれたのかな？旅館だし、古くなったシーツの端で作ったのかな？想像していたら愛着が湧いてしまい、旅館を出るときにはカバンにしまっていた。

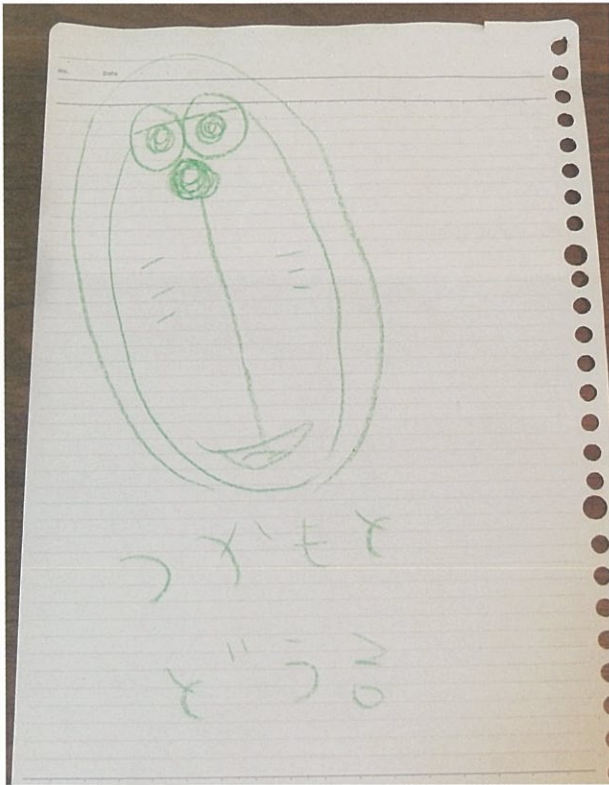
君のおかげでほんのちょっと降られただけで済んだよ、ありがとう。



「昔なつかしい田園風景」 福島 義夫

お客様のところより、引っ越しの為、額が有るとの事なので引取に来て下さい 訪れた所、額より中の「絵」 自分が生まれ育ったワラぶきの屋根、田園風景 たぶん40余年以前の作品かと？

現在はほとんど実在もない場所 長野方面かと思いますが、ワラブキ屋根の補修は、予そより大変です。



「高校時代友達が書いてくれた落書き」 塚本

高校時代、授業中に友達がB5用紙に書いてくれた某ド○えもんの落書きが捨てられません。

その当時はかわいいからと捨てずに取っていたのですが、今では当時のことを思い出す大事なものとなりました。物理の授業中に書かれたその落書きには、物理の先生の口癖と変な実験ばかりさせられた授業、あの時の教室のゆるい空気感、友達とのやりとりが詰まっています。

ほんとにそこらへんに売っているB5のルーズリーフにいろんな感情を思い出させてもらうのです。今は部屋の壁に適当に貼りつけてありますがなんとなくその当時のあれこれに見守られている気がしています。

どうしても、いつも捨てられません。



「出戻りクマのぬいぐるみ」 さなこ

3歳の誕生日に父が買ってくれたものだが、近くに住むアメリカ人の女の子が私以上に気に入ってしまい、帰国する時に欲しがったのであげてしまったらしい。

その後、小学校も高学年になってから、その子の母親が一人で日本へ来たときに、なぜか、このすでにボロボロのクマのぬいぐるみを持ってきて私にと返してくれた。本当にかわいがってもらったらしくその時すでにあちこちつくろってあったのだが、ここまでかわいがったものを元の持ち主に返すという発想になんだかとまどった。

大人になった今、自分のお気に入りのぬいぐるみたちはいつの間にか姿を消していったのに、この名前すらなくクマのぬいぐるみだけが、捨てられずにいる。

古びるにつれ、じわじわと愛着がわいてくる。

家族との思い出



「母の日のプレゼント」 しょうこちゃん

小学校6年生の時、母の日にプレゼントした丸底の『きんちゃく袋』。母に気付かれないように製作し、びっくりさせようと頑張ったもの。喜んだ母、でも開口一番「布団の生地?」。私は母に似合うと思って選んだのに…。

3年前に他界した母の遺品の中で見つけ、大事にしていたくれたんだ…。

思い出はいっぱいだが…。

「ミッキーいないいないばー」 みみちゃん

今から40年くらい前、東京ディズニーランドが開園するよりも前にアメリカのディズニーランドのおみやげでもらったものです。

当時はまだミッキーのグッズが日本にあまり流通しておらず、珍しい、素敵なものをもらってうれしかったのを覚えています。その後、長女が生まれ、次女が生まれ、2人の子供たちがこれで遊びました。

もう子供たちは成人し、これで遊ぶ人はいませんが、なんとなく捨てられませんか。



「せびろ (ABたい)」 駒井 京子

祖父の背広：祖母が亡くなり祖父が引っ越しをするので、整理のために不要品をもらいに夫婦で行きました。夫とサイズが合うのに喜んで祖父は服をたくさんくれました。しかし、背広は、サイズが大きすぎて使えず、リメイクするのはお金がかかり、買ったほうが安い。

という事で捨てるに捨てられず。





「捨てられないカセットテープ」 落合

小学生時代、父親が初めてカセットデッキを購入し、以来、テレビの音楽番組やラジオの音楽番組から好きな曲をダビング。当時のカセットテープが残っています。

編集をするのに苦労したり、雑音が入らないように工夫した事が懐かしい思い出になっています。



「アイロンビーズ」 ミーちゃんママ

現在中3になる娘が小学校低学年のころ、長い夏休みをどうやって一緒に過ごそうかと同居しているお祖母ちゃんが大量のアイロンビーズとイヌやクマやイルカ等の型を買って来てくれて娘はとても喜び毎日のおばあちゃんの居間に行ってはただひたすらイヌやクマを作っていました。

このブームは兄や妹もまきこみかなり長く続き大量の作品ができました。

多くの作品は友達の所に行ったりしましたが、微笑ましいそのころを思い出しなかなか捨てられないイヌやクマたちが沢山います。

「母からもらった時計」 ナイトウ キミコ

高校卒業の記念に母からもらった時計。もう何年か前に壊れてしまって、もう使っていない。修理にだしても、もとの値段より高くなってしまったので、そのまま放置されている時計。今は別の時計を毎日している私。地震があったときに、ガラスの破片にまみれていたその時計。なぜか捨てずに別のところにしまった。あれ以来今日まで目にすることがなかったけれど、見るといつもあの日を思い出す。

親元を離れる私が心配だった母の気持ちがわかる気がする、という自分の成長に気がつく。





「ボロケット」よこばあ

孫が赤ちゃんの時のタオルをおしゃぶりのようにいつまでも使って、大人はそれをボロケットと言ってましたっけ。あまりにもボロになって廃棄した時の10cmくらいのボロケットをまだとってあるんですよ。

本人に見せたら恥ずかしがるかな？



「消しゴム」キムラ ヒロシ

息子が小学校の頃、学校帰りにおじいちゃんが文房具屋さんで、毎日のように消しゴムを買ってくれた。瓶に山のように入っている。これを使うには一生使っても余る。この消しゴム、どうしよう？



「サッカーボール」マッキー

息子が小学校の頃入っていたサッカーチームで使っていたサッカーボール。ボロボロで、今ではもう使っていないのになぜか、まだ壁にかかったままになっていた・・・。



「ぬいぐるみ」マッキー

子供が赤ちゃんの時お気に入りだったぬいぐるみ。未だにダンスの上に置いてあってすてられない～。



「庭石の変化」 島森 寿一

母が存命の頃、大きな庭石を購入（けっこう高価）し、和風の庭として楽しんでいました。時代が変わり、庭の使い方も変化し、庭石も沢山いりません。捨てることも出来ず、今、物置の土台として、石を少しづつ砕いています。



「小鳥の羽」 みみちゃん

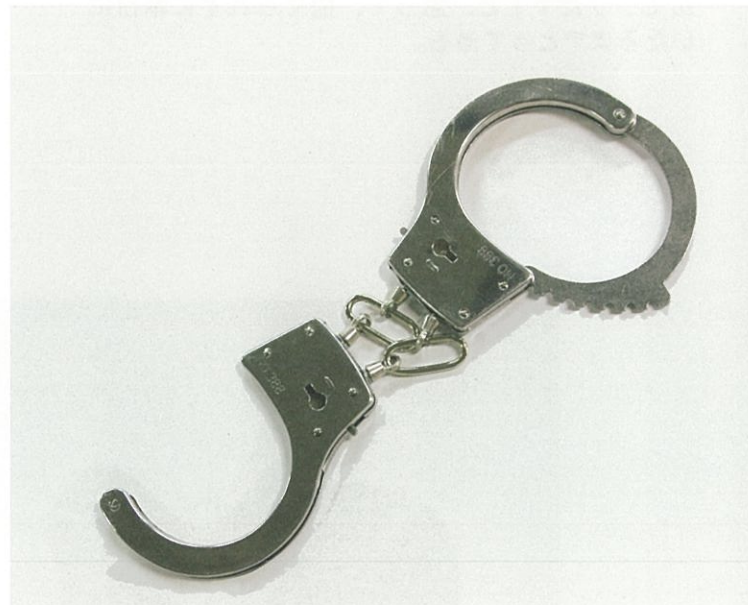
50年くらい前に飼っていた文鳥のこまちゃん、45年くらい前に飼っていたセキセイインコのるみちゃん、10年くらい前に飼っていたセキセイインコのみるちゃんの羽です。

家族の一員としていっしょにすごした大切な思い出が詰まっています、捨てられません。子供のときから使っている宝箱にしまっています。



「長男の工作」 コバちゃん

長男が小学校6年生の時に作った作品です。ずっと捨てようとしてみ置き場に30年も置き放しになっています。使いようのない箱だけど、いまだにこのチョウチョの柄が気になって捨てられません。



「てじょう」 亀井 佑二

子供たちと遊ぶために買ったてじょう。こわれても大人気。



「汁なしあえ麺 担々麺の素」東

私の母は、子どもに不憫な思いはさせたくないという信念を持っている。なので、一人暮らしを始めた頃から、食べ物の仕送りを時々してくれていた。野菜、お菓子、そして、一種変わったインスタントの食べ物。その中にこの「汁なしあえ麺担々麺」があった。私がスーパーで買い物をする時は絶対に買わない代物である。ジャンクフードが結構好きなので・・・

もったいぶって取っておいてしまったら月日が経って賞味期限が1年以上前に切れてしまった。手元にあるのに食べずに捨てるなんて勿体ない！しっかりパッケージされているので、賞味期限なんてクソだ！！と、思って、捨てられずに本日にいたるまでとってある。



「親子の絆」ヘルシア太郎

自分のこづかいで初めて買った、お気に入りのグローブでした。その後、何回か買いましたが、残っているのは現在使用のものとそのグローブだけです。

このグローブは、小学生のころ父とよくキャッチボールをしました。自分の息子が小学生になり、キャッチボールをしようと言われた時、しばらく眠っていたこのグローブを迷わず使いました。

もうすでに父は他界していましたが、なんだか3世代でキャッチボールをしているような、不思議な気持ちになれる、ボロボロですが、大切なグローブです。



「三番目の娘のランドセル」ホノホノ

上の子二人のランドセルは、部屋が狭くなってきたので、他の思い出のものといっしょに捨ててしまいました。ランドセルも捨ててしまったことを夫婦で少し後悔しています。けど上二人は写真やビデオがたくさん残っています。

三番目の娘は、写真やビデオで撮られることが嫌い、ビデオは少ないけど、小さいときのお兄ちゃん、お姉ちゃんより残っています。けど本人はもういらないと言っています。けどこのランドセルは上の子の思い出とも重なり、なかなか捨てられない。

部屋も狭くなってきて、これからどうしよう？



「帰ってきたジョリー」小川 希

「走れジョリー」という小さい頃にやっていたアニメがある。その犬のヌイグルミ。イトコの女の子に父が酔ったいきおいで断りもなくあげてしまい怒りくるっらしい。

父は、別のヌイグルミを買ってジョリーは我が家に戻ってきました。

それからずっと実家の部屋のたなで、主人を待っています。



「メルちゃん」スナザキ チエコ

子ども達が幼稚園在園中、園のバザーに出品するためのメルちゃんの洋服を制作するお手伝いをしました。

その時のメルちゃんの洋服は、園の制服と同じデザインで作られていて、とても思い入れがあり、必然的にメルちゃんが捨てられなくなってしまいました。そして、なぜか制服を着ていないメルちゃんも一緒に残っているのです。

もう娘達はお人形遊びを卒業しているのに・・・。



「子供の落書き」みしまはるき

保育園で子供が書いたラクガキの紙が捨てられない。子供はおそらくテキトーに書いたような気もするが、捨てることができない。

このまま、とっておくことも出来るとは考えられないので、いつか思い切って捨てる日がくるのかも・・・。

上に同じく服等も捨てられないので困る。



「ごみからできたもの」タカハシ フミナ

10月12日のクリーンセンターでの「ごみから学ぶワークショップ広場」でやっていたなおやマンのワークショップに参加して、クリーンセンターからでたごみをはりつけて、たのしいものができました。

母：娘がいっしょうけんめい作ってきたので、すてるにすてられないものです。モーターみたいのが入っていて、なんだか重たい。



「なぜ拾ってくるのだろう」たらちゃん

小学生の息子は、幼稚園の頃から石やネジなどをよく拾ってきた。帰り道に何故か気になって拾ってきたという。歩道を歩いているとは思いますが、あぶないから、ゴミになるからやめなさいといっても、小学校に入っても持って帰ってくる。

石はなんとか、もとの場所へもどしなさいと持ち帰らなくなったが、ネジや金属製の輪など「きれいでしょ!」と小6の今も拾ってくる。よくみると、芸術的にさえ見えてきて、そういえば夏休みの作品のモデルにしたこともあった。

サビでよごれたネジだけど何だか最近私まで、「キラキラしてる」と見えてきてちょっとにが笑い。



『ファールブル昆虫記』全8巻」Kazu

この本は子ども向けに翻訳された『ファールブル昆虫記』(全8巻)の第1巻です。刊行が始まったころ、私の子どもたちは6歳(息子)と4歳(娘)でした。有名な古典ですが、私自身もきちんと読んだことがなかったの、子どもたちと一緒に読もうと全巻を購入しました。

職場から早く帰宅できた夜、子どもたちと一緒にベッドに入って一節ずつ読み聞かせる。そんな風に読み進めました。ほろ酔いで眠気と戦いながら読んでいると、子どもたちから「お父さん、もういいよ。寝よう」と言われたことも。もう二十数年も前のことになりました。

数年かけて読み終えた本は最初は子供部屋の、やがては息子の部屋の本棚で静かに眠っていました。ところが、数年前、ふと気づくと古紙回収に出す古新聞のわきに置かれていたのです。どうやら息子が部屋を片付ける際に捨てようとしたようです。そのこと自体もショックでしたが、8巻は紐ではなくガムテープで束ねられていたことに言葉を失いました。

そんな経緯から『ファールブル昆虫記』は、私にとって、幼い子どもたちと過ごした幸福な記憶を宿すとともに、人生のほろ苦さを思わせる本となりました。

追記：十数年前に『ファールブル昆虫記』の翻訳者・奥本大三郎さんと仕事でご一緒する機会がありました。上記の「幸福な記憶」をお伝えしたら、本にサインをしてくださいました。見返しに素敵なイラスト付きの署名があります。

「七・五・三」杉江

40数年前 娘2人の七・五・三



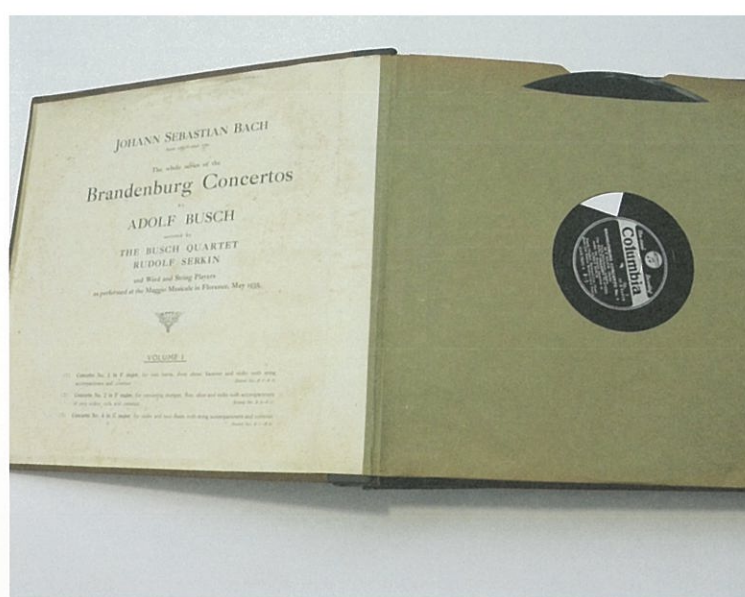
「ファミコン」キムラ シンゴ

おとうさんの実家にあったファミコン（ファミコンというらしい）。実家に行ってやるのが、サンダーバードのカセット。

サンダーバード1号が出てきて、敵をやっつけると、サンダーバード2号が出てくる。ぼくがやっても、サンダーバード1号で終わってしまう。おじさん（おとうさんの弟）がやるとサンダーバード2号がでてくる。

おじさんが子どものころにやっていたファミコンをもらった。ぼくのもっているPSPとぜんぜんちがうけど、たまにやるとおもしろい。

※ファミコンはファミリーコンピュータの略



「SPレコード」シガ カズオ

音楽の好きだった私の父は、私の幼少期にあの有名なレコード会社のワンちゃんのように”蓄音機”のスピーカーの前でSPレコードのレトロな音を楽しんでいました。その姿を見ていた私はいつの間にか父のまねをして音を聴く”子犬”となっていました。

蓄音機は間もなく使えなくなりましたが、あのノイズの多いレトロな音は忘れられません。

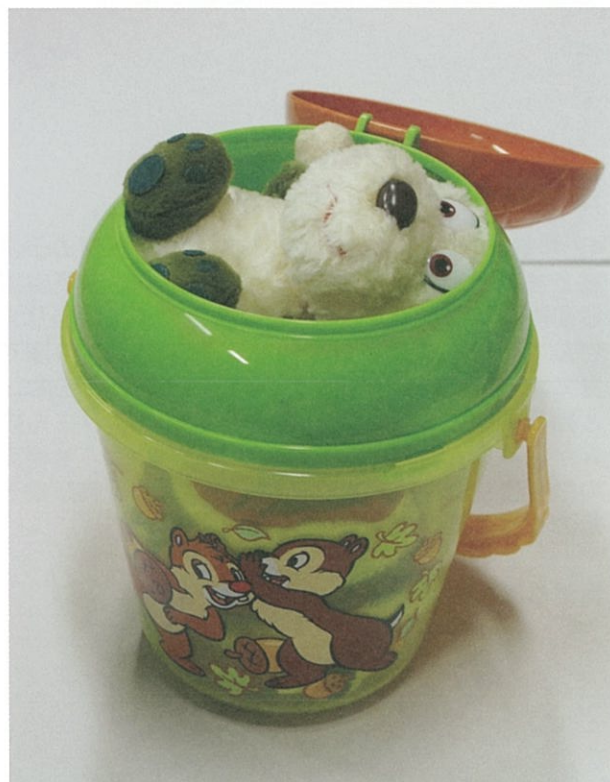
今では使えないSPレコードですが、捨てるに捨てられません！

「中身は思い出」たらちゃん

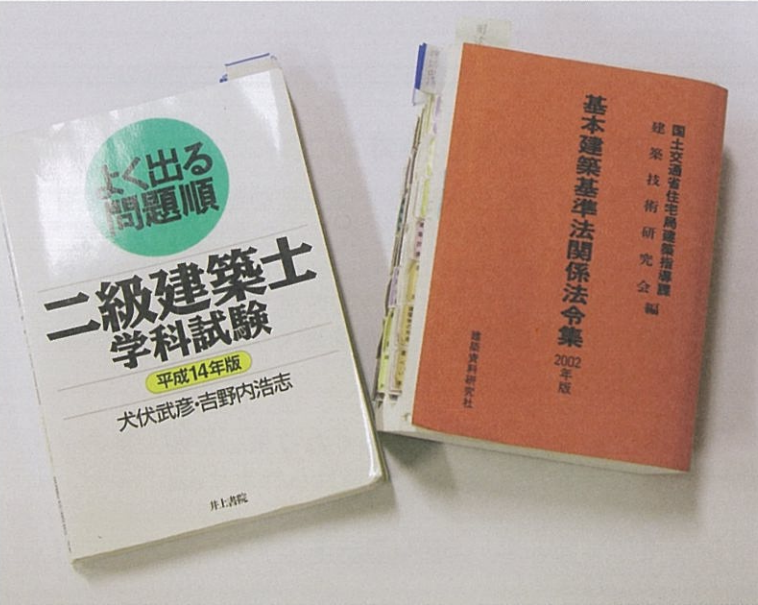
もうすぐクリスマス。毎年この時期になると、我が家の一大イベント、ディズニーランドへよく出かけた。ファーストパスをとるために家族で分担を決め、ランド内を走り回り、時間を有効に使おうと必死。そんな時は味も容器も違うポップコーンを買って、すきっ腹を満たす。

ひと息ついたところで、ゆっくり食事。エレクトリカルパレードに、花火に、買い物に、閉園ギリギリまで夢の国をぞんぶんに楽しむ。今は子供達も大きくなって、家族で出かけることがあまりなくなってきましたが、このポップコーンの容器は何故か捨てられず、未だに家の棚の上に飾ってある。

また行きたいなあ〜、楽しかったなあ〜、そんなことを思い出させてくれる、ちょっとした我が家の宝物である。



自分のきもち



「いつのまにか…」ママ

若い頃、好きな仕事に運良くつくことができ、自分なりに頑張ろうと、資格試験にのぞんでいました。あと一歩のところまで落ちてしまい、その後結婚で、二児の出産、育児と、仕事からも遠ざかり、主婦をしています。

また、資格試験にチャレンジしたい気持ちもあり、もう古くなってしまった参考書なのですが、捨てられません。

「芦田淳の子供服」みみちゃん

47年前、私が10歳の頃に来ていた芦田淳の子供服です。当時は、5歳くらいまでの小さな子供服しか販売しておらず、10歳の私のサイズはありませんでした。陳列されている小さなサイズの服を見て、「これかわいいな、大きいのもあったらな。」と話していたら、お店に居合わせた芦田淳さん本人から声をかけられ、同じデザインの私のサイズの服を仕立ててくれることに。とってもうれしかったのを覚えています。

貴重な服な気がして、捨てられません。





「カセットテープ」大竹

とにかく小さい頃から音楽が大好きだった。買ったCDや借りてきたCDは勿論、まだ店頭に並んでいないモノに関しては、TVやラジオから流れてくる音を拾ってはカセットテープに録音。最初の一音から逃さず、上手く音を拾える様に出来るだけ静かに、緊張しながら録音ボタンを押していたのを思い出す。時代は急激に移り変わり、もはやカセットを聴くという行為や手段すら無くなってしまった。

今振り返ると、ものすごくアナログ。しかも、カセットなんてかさばる。当然音質も悪いだろう。だけど、あの時の必死だった自分や好きだった音楽達を思うと、なかなか捨てられない。



浅草の変なキーホルダー

阿部侑加

「浅草の変なキーホルダー」阿部 侑加

小学6年生、郊外学習で浅草に行った。子どもたちだけの自由行動。とにかく西郷さんの銅像は見たし、国立科学博物館で恐竜の標本におののいたし、浅草寺の店で「水に入れると大きくなる変なぶにぶにしたインチキ玩具」を買おうか買わないか真剣に迷った。

そんな中、私がお土産に選んだのは、緑にキラキラした変なキーホルダーだ。「TOKYO ASAKUSA」の文字さえ入っていればいいのか！と、ツッコミを入れたいくなる適当さ。当時の私が何を思ってこれを選んだかは自分でも分からないが、今度また浅草の仲見世に行けるなら、同じのが売っていないか探してみたいものである。

今はふらりと浅草まで行けるオトナなのでね！



「HIPHOP ブランドのTシャツ」森

学生の頃買った、HIPHOPブランドのTシャツです。半袖だけど、袖の長さが手首くらいまである大きめサイズ。

さすがに、もう着ないだろうと思いつつ、捨てちゃうと、HIPHOPのSOULまで捨てるような気がして、いまでも持ってます。



「鍋敷き」久木野 良子

かまぼこ板から作りました。



「繕う(又は”もったいない”)」久木野 良子

“繕う”という言葉は今では死語になっているのでは？ 30年前、子どもが幼稚園、小学校の頃、繕いものは私の日課でした。ジーンズのひざに当て布をし、ジグザグとミシンをかけたりシャツのゆるんだ袖には靴下のゴムの部分を当てたり・・・と。

勿論主人のワイシャツをあつらえれば、当然のように、衿や袖口の修理用の予備の布が入っていました。デパートや和光でさえ、それを受け付けてくれました。

私達日本人は今、地球2個分の生活をしています。アメリカ人は地球4個分の生活をしています。すでに地球は1.5個分の資源や自然を使ってしまいました。今こそ“もったいない”を大切に！！

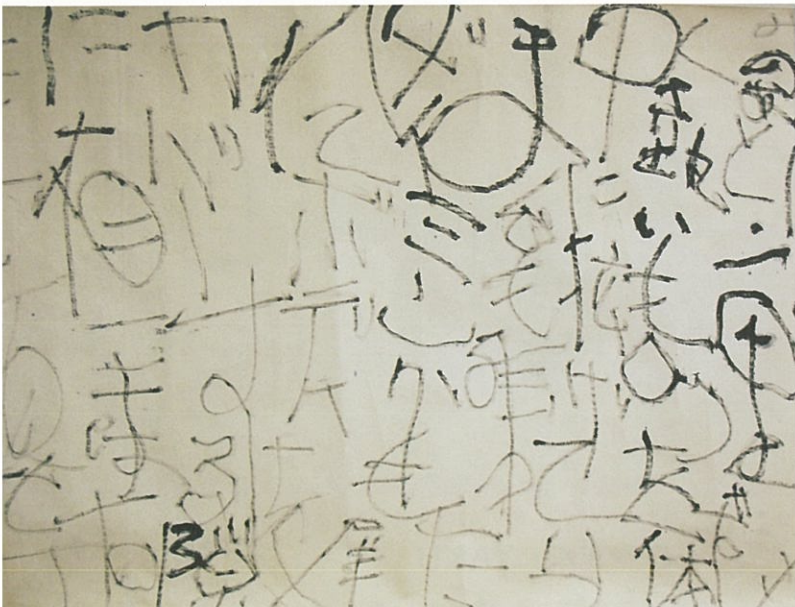


「昔は何でも手作りでした」久木野 良子

昭和20年代、母は私達姉妹3人になんでも手作りをしてくれました。フリルのついたよそゆきのお洋服もオーバーも、セーターも、たしかパンツまでも。

この毛糸のはきものは勿論パンツの上にはいたものですが何十年たっても捨てられなくて大人になってから繕ったものです。

同じ毛糸は勿論ありませんでした。

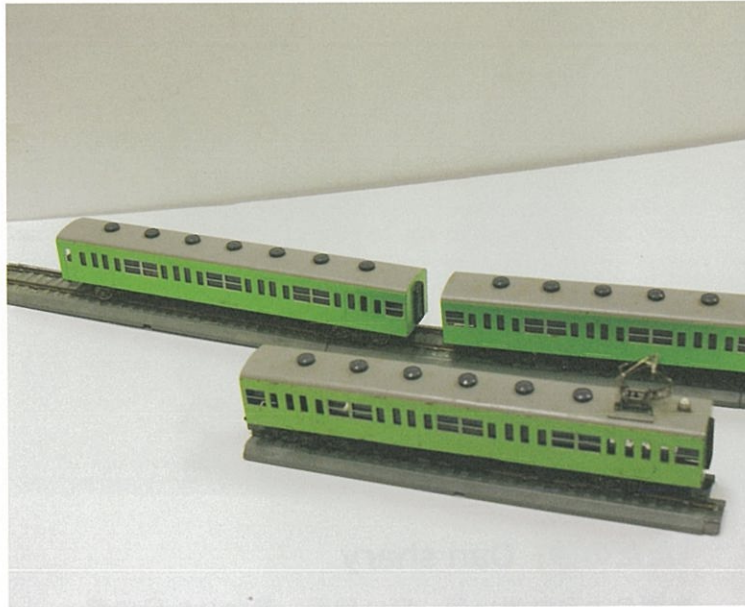


「最後に描いた絵」手塚 一郎

1965年に自分で描いた書道の作品。自分で描いた最後の作品で、石原慎太郎の「処刑の部屋」のボクシングシーンをモチーフに描いたものです。

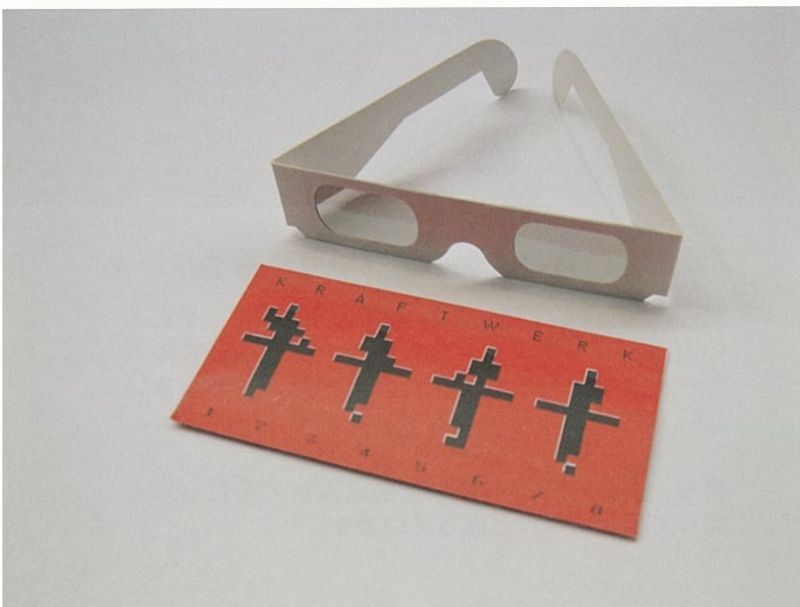
描いた後、本屋でジャクソン・ポロックの作品集を初めて見て、当時の僕は自分の作品がポロックの作品に似ているように感じた。そして、この人にはかなわないと思って絵を描くのをやめました。国際基督教大学の学生だったときこの絵を展示して、観に来ていた外人に売ってほしいと言われたけど、何故か売らなかった。

暑い夏の日、妹が「処刑の部屋」を読むのを聞きながら描いたことを今もよく覚えています。



「山手線の鉄道模型」キムラ ヒロシ

40年前、小学生のとき、お年玉を貯めて、3年間で3両を買ったもの。山手線は箱にしまって、押し入れの片隅に眠っている。



「哀・夏フェス」匿名希望

今年の夏に参加した音楽フェスで、事前配布の3Dグラスを受け取りました。3Dグラスを利用するのは、最後の最後の出番であったバンド。いくつも会場があるフェス。会場から会場へ、人ごみをかき分けて目当ての会場に向かいました。

しかし、真夏に1日中動いたからだは既に限界に。結果、参加せずにそのまま帰宅。お目当てのライブには参加できず。

残ったグラスを眺め、参加できなかったあの夏の日のライブを思い出しています。
すてられません……………



「ただの砂」 Dan shary

楽園のような青い海、白い砂浜。若かりし日の感動が詰まったタヒチやニューカレドニアのビーチの砂。眺めては思い出を・・・のはずが、狭い日本の家の中で邪魔者扱いをされて早 20 年。

今や洗面台の引き出しの奥という理由のわからない場所に放り込まれ、それでも捨てられないのはどういうわけか。

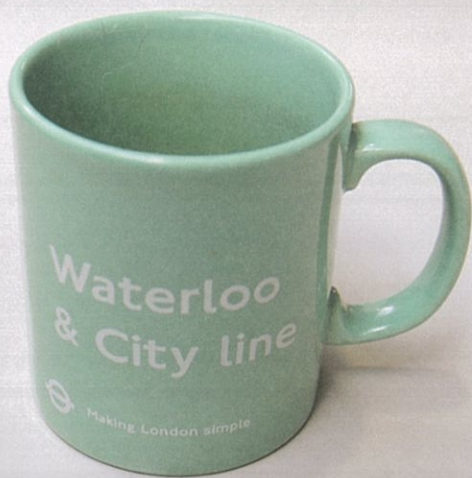
やっぱり、もう二度と行けそうにないと思うビンボー根性のせい？（笑）



「心の安定剤」 TAKU

自分で自ら買った数少ないキーホルダーです。高校生のころ、学校をさぼって万博を見に行き、テレビに映ってしまい、学校にさぼりがばれてしまい、大変なことになった苦い思い出があるものです。

同じ高校生になった娘を見て、このキーホルダーを見ると自分の高校時代がよみがえり、自分を奮い立たせたり、娘に優しくなれる不思議なツールです。



「ロンドン交通博物館のマグカップ」 北川

イギリスのロンドン交通博物館のギフトショップで買ったマグカップ。マイナーな路線名と色が気に入って毎日のように愛用していました。壁にぶつけてヒビ割って以来、棚の奥に眠っています。

楽しかった旅行のことを思うと捨てられません。



「幼稚園の時のスケッチブック」 あやなみん

15 年ほど住んでいた家から引っ越す際に、子どもの頃の作品を色々処分しました。しかし、このスケッチブックの絵にはなぜか自ら惹かれてしまい（笑）捨てられませんでした。

将来、お気に入りの数枚を額に入れてそれっぽく飾ってみたいな、と思っています。

「バリバリスノーボード」 タカハシ ユウコ

私が20年前、スノーボードのはしりのときに使っていた「burton」のボード！まだ、スキー場にはスノーボーダーが少ない中、バリバリスノーボーダーとしてならしたのが、私の自慢です。その後、子供が生まれ、家庭が忙しくなり、このスノーボードは封印。玄関先になんとかすてられないまま、ず〜っと置きっぱなし。

今回、「すてたいけどすてられないモノ」展に出展することで、このスノーボードも久しぶりに日の目を見ることになりました。



「1つめのもの。」 noriko

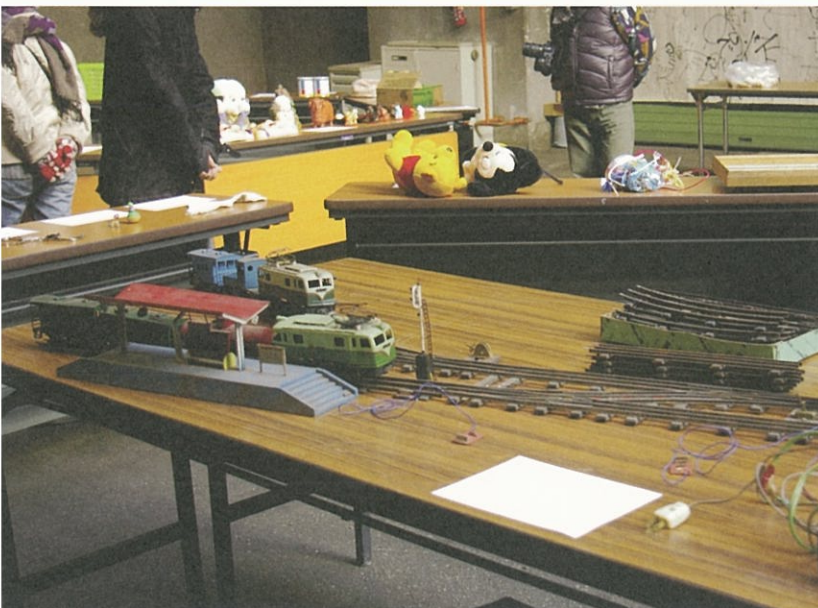
初めて仕事でつくった大きなもの。全長5mものモビルをしばらく捨てられなかった。

今は全部捨てちゃって、その後もサンプルとかも取っておくことはなくなったけど、この時のサンプルの1つだけは捨てようと思ってもずっと捨てられなかった。

「オーゲージ」 ニイガキ トシヒコ

1950年をはさむ小・中学生の頃、小遣いをためて隣町に自転車で買いに行きコツコツと造ったものです。田舎の家は比較的広く、線路を2室使って遊んだものです。動かすと電圧がかかり電燈がうすくなくなったのを記憶しています。東京へ出てきてから遊ぶ広さの室もなくいつの間にかおくら入りになっていたのです。

今は貴重なものと思いつつ、じゃけんにあつかわれ、ゴミ化していたものです。



「ぎょうざ」桜井

大好きなギョウザ。毎日眺めていたいと肌身はなさず持っていました。このたびダイエットを決意。すこし距離をおくことにしました。



「モッズコート」三丁目の匿名希望

今回のテーマから外れるかもしれませんが、これは私のすてたくても、すてられないモノではありません。妻が捨ててほしいと思っている私の物の一つです。

細身のストレートジーンズにボーリングシューズを履き、このミリタリーパーカを羽織るのがモッズの定番。田舎にはジーンズ以外決して売っていなかったこれらの必須アイテムを学生になって購入しました。ちなみに、本物のモッズはモッズスーツにこれをキメるのですが、学生には手が届かず、それにスーツを着る必要もなかった。当時冬場はほぼ毎日これを着て出歩いている、就職してからもしばらく着ていた気がします。その後興味がアウトドアに向かうと着る機会がめっきり減り、今では衣装ケース一つを専用する、妻から疎まれる存在となっています。

私がこれを捨てるつもりがないのは、思い出の品だからということではありません。あの当時のスピリットは私の中で未だ現役で、ザ・フーのレコードと共に私の一部だと思っているからです。てなことは、妻に理解されるはずはなく、また当面袖を通す予定もないのは事実。妻と同様、そんなものを仕舞っておく意味が分からないと思う人も多いだろうことは想像に難くありません。

ただ、そういう方も実は私と同じように、身近な人から捨ててほしいと思われているけど、捨てたくないものがあるのではないかと思うのです。なぜなら、かくいう妻も、私が捨てることを勧めても、



聞く耳を持たず、使わないものをしまいこんでいるからです。我が家と同じく、お互いにお互いのものを捨ててほしいと思っているけど、自分は絶対に捨てないものは、どのお宅にも結構あるのではないのでしょうか。

捨てたくても、捨てられないものより実はたくさんあったりするかもしれません。



「なつかしのウッドラケット」ムライ トモコ

30年前、テニスブームのころ、テニス大会でゲットしたウッドのデカラケ！いつかガットを張って使おうと思っていましたが、一度も使わないで、そのまま押し入れの中で眠っていました。今のテニスラケットはグラスファイバー製で、ウッドのものはありません。

ボルグやマッケンローがなつかしい！クラシック大会でもあれば、このラケットの活躍の場があるのに・・・。



「憧れの山スキー」ムライ ヒサオ

20年前、山スキーをやると思って板を買いました。そして、山スキーをやるたびにビンディングを取り付けようと思ったまま、1度も山スキーをやらないまま、20年経過してしまいました。

いつかやろうと思って、ずーっと取ってあったのですが、今回出展にあたり、そうじをしたら、ソールがはがれて劣化しており、使い物にならないことが判明。今後どうしようか考えています。

「ダイソーで買ったプラスチックカゴの数々」 遠山 尚江

日用品としてダイソーで買った黄緑色のプラスチックカゴがどうしても捨てられません。岐阜から上京してひとり暮らしを始めて早18年。その間に脱衣カゴとしてこのカゴを買いました。笑った日も泣いた日も、一緒に暮らした大切な人も、毎日服を脱いでこのカゴに入れてきました。

昨年、レトロでお洒落なワンルームマンションに引っ越しをし、カゴは部屋の雰囲気にならなくなりました。捨てたかったのですがそのままズルズルと脱衣カゴとして使いつづけてしまいました。

新しい暮らしのために捨てたい、けれど思い出が多すぎて捨てられない。視界に入るたびに自問自答してしまう、そんな日々が続きました。先日キッチンに収納家具を購入したのを機に、用途を台所用具入れに変えてその棚の中に入れました。

これからもずっと、このカゴと暮らして行きます。



どう捨てていいかわからない

「ジアゾ液」イシシー

製図で昔の複写手段としては、この選択肢しかなかった「青焼き」。青焼きの機械で使う溶液が、ジアゾ現像液。使い古した後、捨て方がわからず、ずっと家にあります。メーカーに聞いても、行政に聞いてもよくわからず・・・。だれか教えて下さい。



「眠っている玉石」島森 和子

35年前に家を建築する際に土台の敷石として、玉石を使いました。

現在は家のリフォームをし、玉石は不用となり、ゴミとしても出せず、ベランダの下にねもっています。



「重たいガラス板」 ミラクルボディ

20年くらい前に旅行先のガラス工房で刺身を盛る皿に良いと思い2000円で購入。しかし、重たいので1度も使っていない。

どう処分して良いかわからずごみと一緒にベランダに放置している。



「ライター」 サトウ

2014年、今年の4月にタバコをやめました。灰皿は捨てたけど、ライターは実用品なので捨てられないです。しかし実生活でライターを使うことはほぼ皆無であることに最近気がつきはじめました。

家にライターは20本くらいあります。例えば捨てるとして“ライターが何ゴミに当たるのかわからない。”ということも捨てられない原因の一つになっています。



「ガス缶」 ヤマモト

捨てられると思って家の前に置いたが回収してくれなかった。

捨てたいけど面倒で捨てられない

なんとなく捨てられない

「名前入りのコカコーラ」ミタ

離れた所に住む姉が実家に戻ってきた時に「見つけたよ!」と、わざわざ持ってきてくれた私の名前入りのコカコーラ。その時は「おー!」と感動したけれどなんとなくもったいなくて飲めないなーという気持ちと、コーラ好きじゃないんだよな・・・という気持ちで賞味期限が切れてしまった。

思いきって捨てることができないでいる。



「僕の趣味がこうじて・・・!」 クリーンセンターの小栗旬

これは、ゴルフ (GOLF) 用のティー (長いもの) & マーク (丸いもの) です・・・。(写真はほんの一部です)・・・お茶 (TEA) ではありません・・・(笑)。

ティーは、ゴルフ場で各ホールのはじめの一打を打つ時だけ、このティーの上にボールを乗せて打つことができます。マークは、グリーンでボールを拾いあげるときの目印として使うものです。

ティーは、いろんな種類が売られていて・・・「このティーは飛びます・・・これであなたもプロの飛びを・・・」などの宣伝で、ついついミーハー心がくすぐられ・・・繰り返し・・・繰り返し・・・買ってしまった結果、たまり放題になってしまいました。メーカーは、いろんなゴルフ場で自由に貰えるので・・・これまた、たまり放題になります。

流行り好きでミーハーな私・・・もう絶対に使うことはないと思うのですが、1回だけでも共にゴルフをした同志? という感情・仲間意識が芽生え・・・なぜか捨てられずにコレクション化しています。

はじめて、並べてみましたが・・・う～ん意外とアートじゃ・・・ありませんか!!





「捨てられないノベルティグッズの数々」 日曜アーティスト TOMAKI

「ありがとうございます！」っていただいたものの、「正直使うかなー、どうかなー」ってものが意外と多いノベルティグッズ。もちろん、各社趣向を凝らして「あ、これはいいね！」っていうものもたくさんありますが、でもやっぱりどうしても限られた販促予算の中でのなるべくたくさん作らなければならないとなると、企業名やロゴばかりが目立ってるだけでなんだかちょっと安っぽいつくりになってたり……。

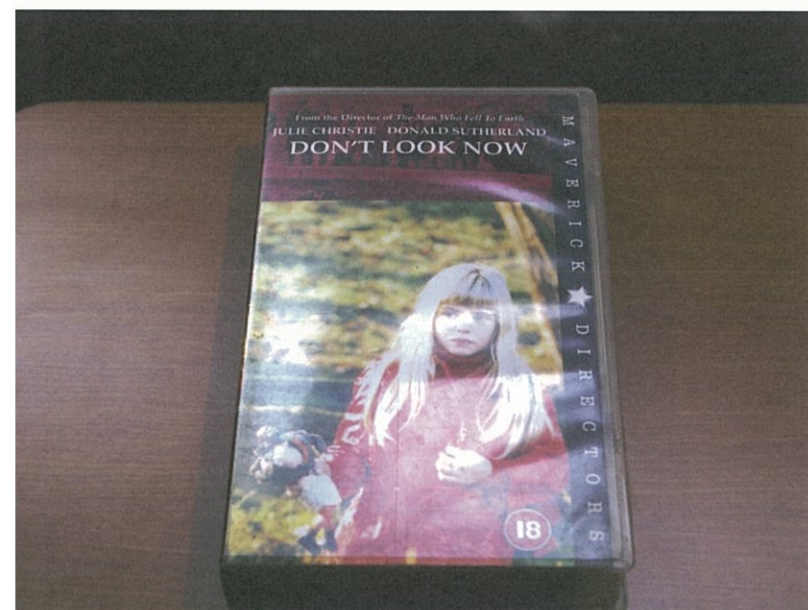
展示会やイベントでもらってきたノベルティグッズ。せっかくだいたいのですぐに捨てるのも失礼だし、つつい貯まってしまうんですね。



「メダル」 ヤマモト

北アイルランドで、子どもたち向けのサンドキャッスルワークショップの手伝いをしたのだが、子どもたち用の景品、メダルが最終的に余ってしまい、手伝った自分に“ありがとう”と授与された。

気持ちはとても嬉しく良い思い出の品でもあるかもしれないが、捨ててもよいかもしれない。



「PAL VHS」 Mc.VMW

イギリスで約 10 年前に購入した VHS テープ。イギリスでは PAL システムの為、日本の VHS デッキでは見れない。

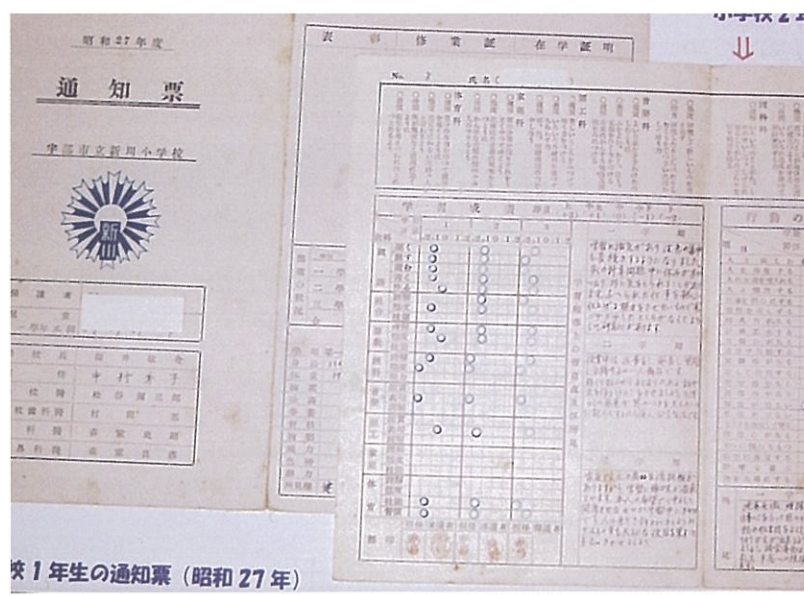
「Don't Look Now」、日本タイトルは「赤い影」です。超面白い映画なんでオススメ！！



「スライムタワー」 茂木 駿明

おれが本やの帰り、始めてひろったので、うまくいえないのですが初めてのモンスターコレクションでした。

今はいらなかったのですがすてようとするところひろったときの感動がさして「また今度すてれば良いか。」そう思い捨てられないんです。



「携帯電話」 いずみ

壊れたり新しい機能に目がくらんだりして、数年おきに買い替えている携帯電話。もちろん買い替えたなら前代のものを使うこともなくなるし、電源を入れることもないので何の役にも立たないけど、毎日欠かさずに持っていたものだからか、それぞれの思い出が詰まっているせいか、捨てられずにいる。

人から貰ったものでも、自分で買ったものでも、やっぱり思い出を感じるものは捨てられない。

「通知表」 グランパK

それは通信簿です。初めて貰ったのは昭和27年7月、小学校の1年生でした。年途中で一度転校したので、通信簿は7通あります。

その後、高校の4年後輩のヒトと結婚しましたが、彼女の成績表はほとんど5評価で、僅かに体育が3でした。一方の私は3ばかり。差を付けられたスタートから、40年後の今もその差は縮まってません。

「木馬のくるみちゃん」 あやなみん

私が2歳くらいのときに親が購入した木馬のおもちゃです。私は当時犬を飼いたかったらしく、この木馬には乗ることなく、くるみちゃんと命名し、首輪をつけて家の中を引っ張りまわしていたようです。最近姪が遊びに来て、乗ってくれました。

ボロボロですが、名前を付けてしまうと愛着がわき、なんとなくそばにいてほしい感じがして手放せません。

「ECO うちわ」 その気

大学1年の頃、課題で余った毛糸とその辺でひろったうちわの骨を使って作ったテキスタイルうちわ。すてるハズのものを集めたエコな作品だったが、そこそこ重みがあるため、あおぐことができず、うちわという機能を失い、道具ではなくなってしまった。

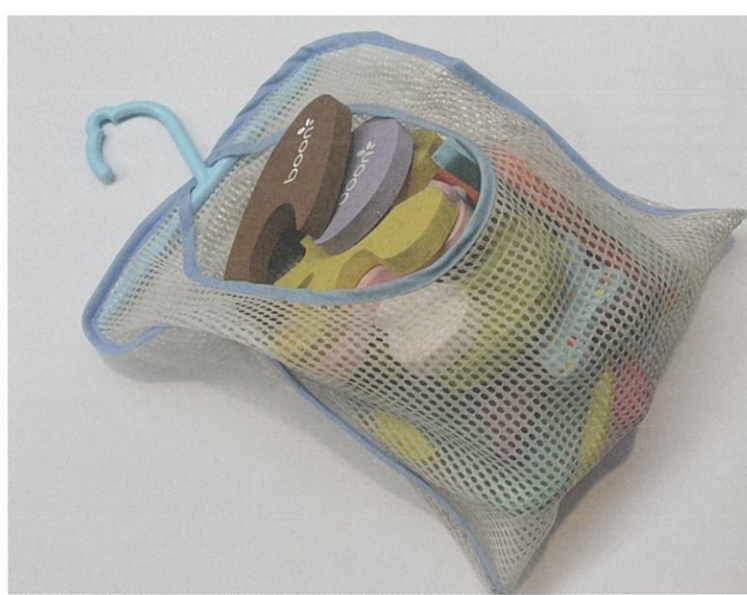
もともとのコンセプトがゴミをゴミでなくすというのとわりと愛着があるが正直いらぬ物だったりする。





「中国結びの亀」畑中

中国結びの技能認定をいただいて、日本人学校で子どもたちに教えていました。習い始めたばかりのころ、初めて作らされた・・・いえ、作った大物がこの変なミドリガメです。台湾で亀はかなり縁起の良いものだそうです。技術も拙く、色も形も微妙なのに、何故か捨てられません (T _ T)



「ぶよぶよ」おがわ はる

おふるにあるかべにはるぶよぶよのものです。たのしいものです。

「自由の女神」うなぎ

中学校の卒業記念制作でつくったハンコ。持ち手部分は自由の女神、ハンコ部分は名字を彫った。いつの間にか自由の女神も手が折れてしまい、もはやなんだかわからない。今まで一度も押印したことはないが、15年以上部屋の片隅にあり続けている。

実家を出て一人暮らしを始めたときにも、なぜか連れてきてしまった。
これを機に職場で使ってみようか・・・。

「南部鉄製モアイ像文鎮」中村

南部鉄製モアイ像文鎮です。昔から（たぶん小学生くらい）持っているけど、いつ頃買ったものなのか、それとも誰かのお土産だったのか、全く記憶にないのが不思議なところです。

そして特に愛着もない筈なのに、幾多の断捨離をくりぬけて何故いまだに持ち続けているのかも不明な品です。



集まってしまったモノ



「とうき」 緑町むチューラウンジ

ご近所さんからたくさんいただいた“とうき”

古い なんか愛着が かわいい

手作り



「ボールペン、シャーペン」 イチエン

職業から文房具に興味があり、ついつい買いためてしまいました。もう書けないとわかっていてもなかなか捨てられずにたまっていき、数えたことはありませんが、100本以上はあると思います。

今年定年になり、家には何も持ってこないように言われているので、どうしようか考え中です。

「食品や日用品などを購入した際の容器」

兵藤ちあき

なんとなく何かを収納するのに使えないかと取ってありますが、特に何も入れたりしていません。最初に捨てなかったのは、物としてデザイン等に魅力を感じたからだと思います。

だんだんと、缶を集めたいという気持ちも購入の動機になっています。





「服のボタン」 伊藤真希子

小さな頃から、買うとついてくる替のボタンや、家族みんなの着なくなって処分する衣服のボタンを「いつか使うだろう」とストックしてしまう癖があります。上京した際にも裁縫セットと一緒に持ってきました。

いつでもボタンを出し入れできるように机に置いてあるのですが、母が使っていたコートボタンや、父の着ていた服の飾りボタンが入っていたりするので、たまに懐かしいなあとい眺めてしまいます。

ちなみに、今までストックしてきたボタンは一度も使ったことはありません。溜まる一方です。



「ペットボトルのキャップ」 テラッコ前川

SSA?・・・う～ん脂肪かな。なんて事ではなく、現在5.5キロにもなったうちのペットボトルのキャップ達。

本来は、環境の為にペットボトル使用は控えましょう、だったはず。が、時代の波には抗えず今や熱中症対策にもお手軽なPBは欠かせない。後ろめたさを救う社会貢献という誘惑。キャップを集めてワクチンを送ろう!かくして、本末転倒の如くに、キャップ欲しさにPBせっせと買ったりして。

しかしそのキャップ、どこに持ち込んで良いのやらで、その数は増え続け、そうこうしている内に「それってもうやってないかも～」と言われて茫然。エコ落第の私の救世主は今や新たなゴミの山となったのか?

もしや、キャンペーンがほんとに終わってたら、このゴミ、引きとってもらえますですかね～?



「おまけとガチャポン」 キムラ アヤ

水族館、博物館に行くと、必ず2回やる。動物、魚、虫が好きです。



「紅茶の袋と缶」 キムラ アヤ

かわいい、きれいでなんとなく集まってしまった。並べるといがいきれいで楽しい。



「貝がら」 キムラ アヤ

バリ島でひろってきた。貝がらや小石は大好き。



「かもされたい」とよ

大好きで集めたけれど使い道やうまい飾り方がわからずタンス?のこやしに・・・。

クリスマスツリーに飾ろうかな?と悩みつつ捨てられません!かもされたい～～。



「マッチ」モタニイコ

若い頃は、喫茶店、レストラン、旅行先、ホテル等を訪ね、おじゃました先々で手にしたマッチ。ひと頃は、集めることも友達同士何となくはやり、いただいて来ましたが、いつかそのマッチケースを見る事で、思い出したりと集めました。

何十年間の物もありますが、ずっと以前の物は・・・(一部になります)。マッチの灯のようにかすかな記憶とで当時を思い出せるのかなアーと。今は、ライター、チャッカマンと便利になり、また煙火離れで、なかなか・・・でも何故かすてられずにひきだしに入れたまま。



「きっぷ」いとうさとし

旅行や出張などで使った切符です。本来は改札口で回収されてしまうものですが、窓口で「この切符ください」と言ってもらってきます。

ほとんどの駅では「無効」の印が押されますが、観光地などでは工夫を凝らしたデザインに「乗車記念」の文字。こうなるともう立派な旅の思い出。すてられません。

「セーラームーンのピンバッチ」みずよ

小学校の頃集めていた、セーラームーンのピンバッチ。確か、お菓子か何かのおまけについていたものだと思います。未だにセーラームーンは好きだけど、ピンバッチを使う機会なんてもうない。でも幼い頃、当時は本当にセーラームーンが好きで、一生懸命集めていた記憶があり、そのときの楽しかった気持ちや高揚感が忘れられず、すてられずにいます。

この3倍くらいの量を持っていたはずなんだけど、いつのまにか見つからなくなってしまった。実家のどこかに眠っているのかなあ。



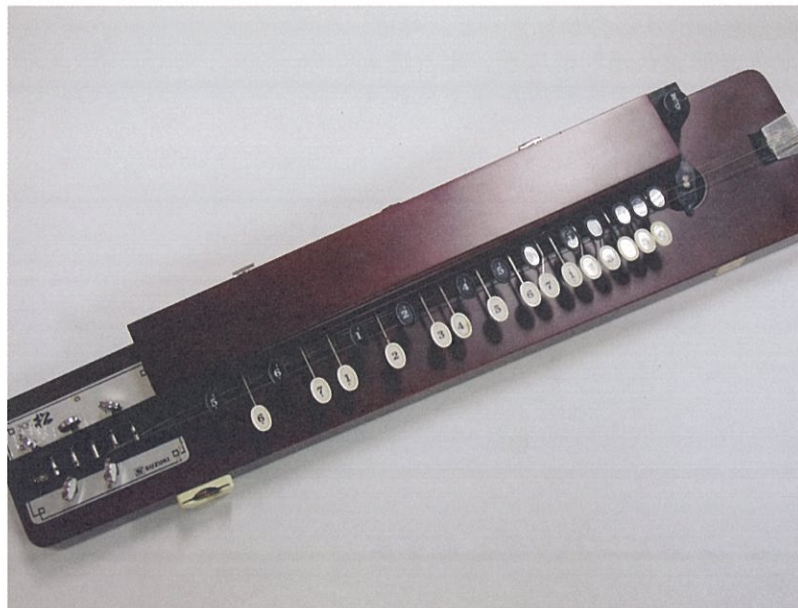
いつか使えるかも？



「思いでのラングのブーツ」 キムラ ナオミ

私が20年前、準指導員を取ったとき履いていたラングのブーツ。あのころはスキー検定を受ける人はみんなラングのブーツを履いていた。

7～8年前、子どもが小学生のころ、家族でスキーに行った以来使っていない。なかなか忙しくて、スキーに行けない。このブーツを履くチャンスはあるのだろうか！



「ばあちゃんの大正琴」 ノリ☆ボンヤスキー

ばあちゃん愛用の大正琴。引き取ってはみたものの使われることなく押入れの中へ。何度も何度も捨てられそうになって、その度「いつか使うから」とまた押入れへ。

先日押入れから出してみると、子供が興味を持って遊びました。きっとばあちゃんも喜んでいるね。

「猫の毛」 ミタ母

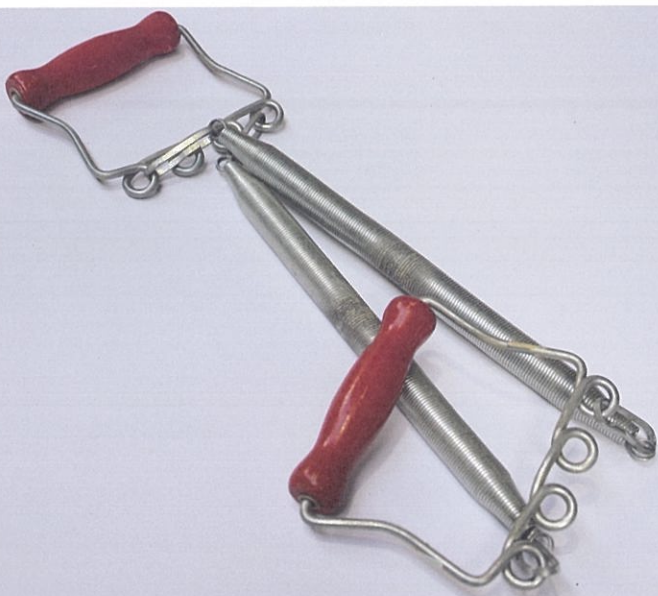
母に捨てられないモノがあるかきいてみたところ、
でてきたのはペットの猫の毛。飼い猫が長毛の為、
毎年夏になると辛そうで毛を短く切ってあげている。
なにか（フェルト？）にできそうでとってある
けれど、押し入れにしまったままになっていた。

何かになりそうでとっておいてあるものは実際の
ところ何かになった試しがない。



「紅茶。次はお茶」 野中 浩一

ガラス製の急須。ガラス製のコーヒーサーバー。
どちらもいただき物なのですが、精神の緩みがそ
うさせたのか、ほぼ同じような時期に流し台での
不手際によって割ってしまいました。波打ち際に
落ちたボタンを拾って上げられなかったような罪
悪感におそわれました。つらいので赦されたいし
救われたいです。ですが、まだ使える感はひとり
立ちした瞬間から各自ムンムンと漂わせていて、
お互い足りないところはあるけれど、出会った頃
のような新たな関係をまた一から築いてゆこうと
思っているんです。



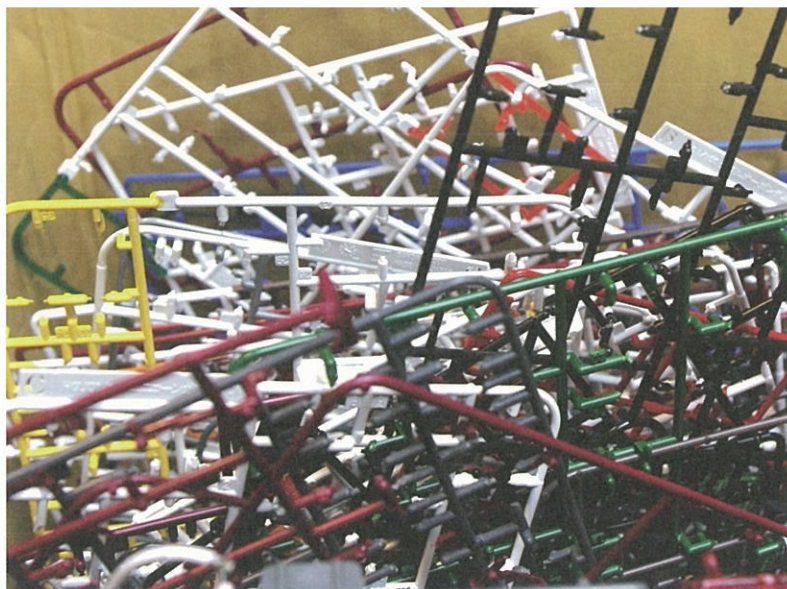
「やっぱりいらなかった。」チチ

去年引越しをするときに彼氏の友達が棚をくれるというので引き取りにいった。その人がこれも持ってきていなよと言ったのがこの運動器具。彼氏は使わないからいらないと言ったけど、私は何かに使えるかもといってもらってきた。でもやっぱりいらなかった。でももらうと言い張った手前、捨てられない。



「ペットボトルカバー」名倉 聡美

持ち歩きできるようにひもでペットボトルカバーを作りはじめました。なかなか完成せず。



「ガンプラカラ」 ふじまこと

この5年ほど作り続けてたガンプラ。それをつくったあとの箱はもちろん捨てられない。何に使う訳でもないが、なぜだか全部積み上げていて部屋の一部を占拠している。そしてその箱の中には必ず作った跡の残骸が残って捨てられないでいる。

絶対にこれを使うことはないと思うが、もしかしたら何か使うかもしれない・・・あったら便利な時が来るかもしれないと・・・つついとおいてしまう・・・とそれを親父がうれしそうに集め始める。「これはいい、すごくいい」とうざい。

まだまだたくさんあるが、これはほんの一部。



「フランス人からの贈りもの」 ゴクウ

フランス人の友達が日本を離れてしまう時にくれたもの、その友達は悟空が好きでプロテインを飲んで頑張っていた。

自分はプロテインなんて飲まなくてもマッチョなので、必要ない。次回誰か来日したらあげようと思う。

だから捨てられない。

SSA テラッコより一言

余計なモノのないスマートな生活が美しいという憧れはあっても、つつい溜め込んでしまう実用を失ったモノたち。これらと改めて向き合い、なんで捨てられないのか考え、そのエピソードをとにかく沢山集めてみることで、何かが見えてくるのではないかと始まったこのプロジェクト。当初は、そんな他人にとってはごみのようなものを並べて何が面白いのかという意見や、他人に捨てられないモノがあると知られるのは恥ずかしいなど、モノ集めは難航しました。しかし、エピソードとモノが集まるにつれ、次第に共感が生まれ、そういえば我が家にも、という風にモノがモノを引き寄せ、最後には100を超える「すてられないモノ」が集まりました。

こうして大事だから捨てないというより、なんとなく捨てられないという微妙な立場のモノたちが一堂に会すと、それぞれのモノから、それに関わった（過去の自分を含め）他者の本当に些細な思いや行為に想像をめぐらし、それをいつまでも心に留める人々の姿が垣間見え、温かい気持ちにさせられました。

また、モノを集める過程で、武蔵野クリーンセンターを通じ、地域で様々な活動をしている方々に引き合わせていただきました。普段は、この地域とあまり縁のないテラッコたちも、いろいろな世代や背景を持つ方々から捨てたいけど捨てられないモノについてだけでなく、地域でのそれぞれの活動や、抱える問題など、様々な思いを伺う貴重な機会を得ました。

このように話を伺うだけでなく、実際に大切なモノをお預かりし、またそれを返却するという手間を考えると、このプロジェクトは、クリーンセンターと周辺の住民の方々との日頃からの関係と協力がなければ成り立たないものでした。限られた紙数のため、エピソードのみをご提供いただいた方、一人で何点も出展して下さった方のエピソードとモノを、すべて紹介することはできませんでしたが、この場を借りてこのプロジェクトに関心を持ち、協力して下さったすべての方へ感謝を申し上げます。

千葉 佐奈子

おわりに

武蔵野市内で発生するごみは1年間に約4万トン、ごみ処理には約30億円もの費用がかかっています。ごみ処理の現場にいと、まだまだ使えそうなきれいな家具や楽器、鍋などがごみとしてたくさん搬入されるのを目の当たりにします。ものがごみとなる瞬間は、そのものとしての機能を失ったときではなく、所有者ともとの関係性によって訪れるのだと思います。

今回の「すてたいけどすてられないモノ集め隊 (SSA)」は、ものがいつごみとなるのか、ごみとは何かを考えるプロジェクトとして、大変興味深い活動でした。ボロボロのグローブやぬいぐるみはごみとして捨てられても違和感のないものです。しかし、所有者のものへの思いがこれらを大切な宝物にしています。

私たちは、ごみ処理施設の建設・運営をする立場から、ごみを減らしていくことが大きなミッションです。ある人にとっては「ごみ」でも別の人にとっては「宝物」となるのですから、ものを必要とする人の元に届けることによっても、ごみを減らすことができると考えました。

平成29年(2017)4月には新工場が稼働し、平成31年(2019)6月には既存工場の一部を活用した環境啓発施設「エコプラザ(仮称)」の整備も予定しています。ごみがごみにならず、資源に、宝物になれるような仕組みづくりを研究していきたいと思っています。

すてられないモノ募集にあたり、コミュニティカフェ(けやきコミュニティセンター、UR武蔵野緑町パークタウン)において、すてられないモノに関するインタビューをさせていただき、「30年前の洋服、いつか着ることを夢見て大切にしまってある」、「写真は絶対に捨てられない」など、貴重なお話をうかがうこともできました。

すてられないモノを集めるのは、想像以上に大変でした。なかなか応募がなく、焦ったこともありましたが、最終的には100個以上集まりました。

SSA隊員みなさま、本当におつかれさまでした。またインタビューにご協力いただいたみなさま、大切なモノを今回のイベントのために貸してくださったみなさまに心から感謝を申し上げます。

武蔵野市環境部クリーンセンター
木村 浩・平松 彩奈

すてたいけどすてられないモノ Document

平成 27 年 (2015) 3 月 23 日発行

編集 西岡一正、塚本加世子、掛谷泉、千葉佐奈子 (テラッコ)
監修 小川希、高村瑞世 (一般社団法人 Ongoing)
デザイン 北川麻衣子 (テラッコ)
写真 平松彩奈 (クリーンセンター)、テラッコ
協力 新武蔵野クリーンセンター (仮称) 施設・周辺整備協議会、武蔵野クリーンセンター運営協議会、けやき茶社 (けやきコミュニティセンター)、グリーングラス (UR 武蔵野緑町パークタウン自治会)、緑町むちゅーラウンジ、武蔵野市高齢者総合センター、緑町きらきらプロジェクト、クリーンむさしのを推進する会、公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団 (武蔵野プレイス)、中央コミュニティセンター、『TERATOTERA 祭り』出展アーティスト

発行 武蔵野市 (環境部クリーンセンター)
公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室
〒130-0026 東京都墨田区両国 3-19-5 シュタム両国 5 階
TEL:03-5638-8800
※「東京文化発信プロジェクト室」は、平成 27 年 (2015) 4 月 1 日より「アーツカウンシル東京」と組織統合する予定です。

お問い合わせ先 TERATOTERA 事務局
〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町 1-8-7 Art Center Ongoing 内
TEL : 090-4737-4798
E-Mail : info@teratoterajp Web : teratoterajp
Twitter : twitter.com/teratoterajp Facebook : facebook.com/teratoterajp
武蔵野市環境部クリーンセンター
〒180-0012 東京都武蔵野市緑町 3-1-5
TEL : 0422-54-1221

【SSA プロジェクト概要】

実施期間：平成 26 年 (2014) 7 月～12 月

主催：東京都、武蔵野市 (環境部クリーンセンター)、東京文化発信プロジェクト室 (公益財団法人東京都歴史文化財団)、一般社団法人 Ongoing

SSA

テラッコ / 阿部侑加、伊藤真希子、稲橋誠二、大竹瑞栄、掛谷泉、加藤裕士、角野崇宜、木下美奈子、北川麻衣子、北村美樹、後藤響子、佐藤佳那、高村瑞世、千葉佐奈子、塚本加世子、遠山尚江、中村孝士、西岡一正、畑中さおり、東晶子、兵藤ちあき、前川順子、森聡史、柳本紀子

クリーンセンター / 木村浩、三浦伸夫、馬場武寛、神谷淳一、平松彩奈、木村浩子

新武蔵野クリーンセンター（仮称）について



新クリーンセンター完成イメージ

現在のクリーンセンターは昭和 59 年（1984）に建設され、稼働から約 30 年が経過しています。機械の耐用年数などの状況から、周辺住民の方々のご理解とご協力をいただき、現施設の東隣に平成 29 年（2017）4 月稼働を目指して、新クリーンセンターの建設工事を安全に進めています。

